

足利兄弟！

尊氏はカリスマ、直義は実務派か？

2025/09
横浜歴史研究会
真野信治

日本の歴史上、何組もの兄弟が活躍をしていることが史料からも見て取れる。豊臣秀吉・秀長のように仲が良かった兄弟や、家督を巡って骨肉の争いをした織田信長・信勝(行)兄弟などが有名であろう。特に兄と弟の両者の場合、それが武家であると仲が良いか悪いか、極端に分かれる。そんな中、この足利兄弟は、異例と言わざるを得ない。はじめは非常に良好であった兄弟の仲だが、幕府創設以降、その権力的立場から、相いれない関係となり、ついには「観応の擾乱」と言われている“世紀の兄弟喧嘩”に発展してしまう。この辺りの経緯を史料などから追ってみる。

鎌倉時代の足利氏

足利氏は源頼朝と同族の清和源氏の出身であり、鎌倉時代を通じて源氏の筆頭格の家柄として認識されていたとされる。源氏将軍が3代で途絶えた後も、有力御家人として幕府内で影響力を持っていた。ただ、足利氏は執権北条氏と婚姻関係を結ぶことで、その地位を確固たるものにしていったが、一方で、北条一族と同化していたとも考えられている。

特に足利義氏(足利尊氏の高祖父)は、北条泰時を補佐し、承久の乱や和田合戦で活躍するなど、北条政権下で重要な役割を担い、その地位を確立していた。三河守護に補任され、承久の乱や宝治合戦の恩賞として所領を獲得するなど、鎌倉時代の足利氏の全盛期を築きあげた。また、所領についても鎌倉時代を通じて、足利氏は三河国をはじめ、上野、美作、陸奥、安房など広範囲に所有し、上総国の守護にも補任されるなど、経済的基盤をも確立していた。定説においては、鎌倉時代末期、北条氏の強権政治に対する不満が高まるなか、足利尊氏が元弘の乱で後醍醐天皇の倒幕運動に当初は幕府方として加わるが、後に天皇方に寝返り、六波羅探題を攻め滅ぼした、とされている。さらに、新田義貞らの蜂起と連携して鎌倉も陥落させ、鎌倉幕府滅亡の立役者となったとされている。

鎌倉時代の足利氏は、源氏の名門だから幕府内で重んじられていたのではなく、足利氏が北条氏の姻戚であり、尊氏自身も得宗高時を烏帽子親(高氏の「高」は高時公の偏諱)とし、時の執権赤橋北条守時の妹(登子)を正妻に迎えていたから北条氏中心の鎌倉幕府において厚遇されていたのである。そうすると、足利氏が北条氏を倒して天下を取ることを悲願としていたという『難太平記』の記述は、到底従うことは出来ない。足利氏は北条氏に抑圧されていたのではなく、むしろ後期鎌倉幕府の得宗専制体制の受益者(「特権的支配層」だったと言っても過言ではない。

だから…尊氏は北条の親族として討たれるのを恐れて官方へ鞍替えした可能性もなくはない。

『梅松論』が語る足利尊氏像(抜粋)

- 一、心が強く、合戦で命の危険にあうのも度々だったが、その顔には笑みを含んで、全く死を恐れる様子がない。
- 二、生まれつき慈悲深く、他人を恨むということを知らず、多くの仇敵すら許し、しかも彼らに我が子のように接する。
- 三、心が広く、物惜しみする様子がなく、金銀すらまるで土か石のように考え、武具や馬などを人々に下げ渡すときも、財産とそれを与える人とを特に確認するでもなく、手に触れるに任せて与えてしまう。



後醍醐天皇は「異形の天皇」だったのか？

南朝正統史観は「南朝正統」と名前にあることから後醍醐天皇の政治的手腕を賛美しているものと誤解されることがある。しかし実態は「南朝の正統性」「大義名分論」「忠臣論」と「後醍醐天皇の政権評価」は全くの別物として扱われていたのである。むしろ、後醍醐天皇が「暗愚で不徳の君主」であったこと、それでもなお正統であると考えが故に、この暗君に生死を賭し一身を捧げて仕えなければならなかった「忠臣」の「悲劇」が、判官鼻眞の形で人々の共感と呼んだのであろう。このように南朝正統史観でも後醍醐が批判されるという事態が起きていたと説く研究者もいる。



後醍醐天皇

花園天皇が謙虚に宋学を学び善政を追求していたのに対し、後醍醐天皇が宋学から学んだ徳は「肥大した自我」そのものであると、痛烈に批判している論考がある。加えて、建武政権で設けられた「窪所」という組織が鎌倉幕府の「問注所」の「問注」の草書が「窪」に似ているために言葉遊びで定められたという説を紹介し、驕りと鈍感力が見られると批判し、後醍醐天皇は伝統的公家政権のパロディに過ぎないとしている。建武政権の家格・先例にとらわれない人事についても、それらが有効に機能することなどなかった。**結局のところ、後醍醐は「南北朝」という時代、つまり二人の天皇・二つの朝廷を生み出すことで、天皇の権威を決定的に下落させてしまった、と論じている**(本郷恵子『院政 天皇と上皇の日本史』より)。

鎌倉幕府滅亡の経緯

元弘の変を起こした後醍醐天皇であったが、蜂起は失敗し、幕府により隠岐へ流される。しかし反幕府の動きは沈静化せず、全国に広がり、次第に幕府を追い詰めていく。そんな中、足利尊氏が後醍醐方の討伐を命じられ出陣した。しかし尊氏は、突然幕府を裏切り、山陰道を引き返し、京都の六波羅探題を攻略した。なぜ、尊氏は幕府を裏切ったのであろうか？

■六波羅探題襲撃

実は、幕府が大軍を預けて派遣した討伐軍の総大将は尊氏だけではなく、もう一人、北条一族の名越高家という若輩の将が任命されていた。つまり、討伐軍大将は二人制であったのである。この名越高家は血気盛んというか軽率というか、いきなり飛び出して討死してしまう。『太平記』の描写によれば、その余りに華美に過ぎるいで立ちによって大將軍であることを敵に難なく覺られ、集中的に攻撃を受けることとなったという。この名越高家討死は、結果として非常に重要なインパクト事となる。これにより、尊氏が討伐軍のすべてを掌握できることになり、その後の行動に多大なる影響を及ぼしたのである。

幕府はなぜこのような稚拙な大将・名越高家を指名したのか？それは当時の北条一族が極度の人材不足状態であったことが考えられる。北条氏嫡流の覇権すなわち得宗家主体の幕府政治は、有力御家人の大多数を消滅・没落させ、北条氏有力庶族まで淘汰してしまっていた。すなわち、幕府の人材は実は枯渇していた。高家ほどのレベルの低い者でも起用せねばならなかったのである。

尊氏が薩摩の島津貞久に御醍醐陣営への参加を呼びかけた密書がある。元弘三年(1333)四月二十九日の日付が入っている。「伯耆国より勅命を蒙り候の間、参じ候。合力せしめ給い候わば本意に候。恐々謹言。四月廿九日 高氏(花押) 嶋津上総入道殿」尊氏が北条氏を裏切り諸国に軍勢催促状を發したのがまさにこの日なのであり、名越高家討死したのは四月二十七日である。結果的には非常にタイミングの良い措置であったので、のちに新田義貞が「形勢の不利を見て、安全なところで幕府を見限り、討幕の功勞をさらった」と尊氏を批判しているが、ある意味本質をついたものかもしれない。島津氏はこの密書を受け取ったのち鎮西探題を襲い、鎌倉幕府滅亡の三日後にあたる五月二十五日、尊氏の義兄赤橋北條英時を自害に追い込んだ。

■寝返りの遠因

一般的には、鎌倉幕府における北条氏の執権政治体制に対する不満が高まり、支持も下がり、その為反乱が起きたと言われている。が、足利尊氏の寝返りの直接要因はそのあたりではない。元弘元年(1331)の後醍醐天皇の笠置山挙兵時に出兵を命じられたが、実はこの少し前に尊氏の父親の貞氏が死去している。なので「喪中」期間中であることを理由に辞退したが認められなかった。この事は、尊氏をはじめ、足利家中から不満が噴出したともいわれている。さらには、元弘三年(1333)の出兵時、今度は尊氏が病気を理由に辞退したが、またしても認められなかった。おまけに出陣に当たって正妻の登子と嫡子の千寿王(後の足利義詮)を人質として差し出させるという異例(失礼)な命令まで受けている。とても北条家の娘婿としての一門、源氏の血縁者としての一門の家柄を有する足利家に対しての扱いとは言えなかった。もともと、北条家を取り巻く情勢はそれどころでは無かったのであるが…。

おそらく尊氏自身の判断のみで寝返りを決断したわけではない。尊氏の母の兄である上杉憲房の影響もあったという。加えて、後醍醐の討幕を命じる綸旨を尊氏に届け、再三挙兵を促していたのが細川和氏・上杉重能(憲房の養子)であり、主に上杉一族ら家臣たちの勧めに従った可能性は高い。

～尊氏は、なぜ、幕府軍を使って幕府を滅ぼすことができたのだろうか？～

足利尊氏は佐々木道誉や赤松則村らと呼応して六波羅探題を攻め落とし、京都を制圧した。北条仲時、北条時益ら六波羅探題の一族郎党は東国へ逃れようとするが、五月九日、近江国の番場蓮華寺で自刃し、光厳天皇、後伏見上皇、花園上皇は捕らえられた。しかし、尊氏の裏切りに対し、なぜ数万もの幕府軍が追従したのだろうか？一人一人の御家人には意思があったであろうし、生存の戦略・打算・義理もあった。名誉を重んじる武士の思考から考えても、幕府の構成員が“幕府を攻撃しよう”と言う世論で一致したことは甚だ不審である。しかし、鎌倉と六波羅が彼らに滅ぼされたことは動かしがたい事実である。実は・・・

彼らが裏切った相手は幕府ではなかったのだ!!

尊氏が御家人らに示した後醍醐天皇の綸旨には、「北条高時一派を討て」であって、「鎌倉幕府を倒せ」とは一言も書かれてはなかった

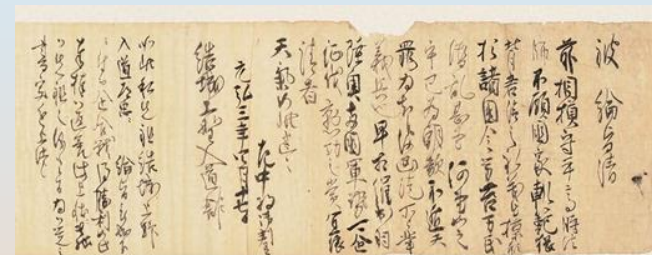
当然だが、「幕府を倒せ」では、幕府を生きる御家人が同意するはずがない。一方、北条氏は彼らの主人ではなく、とてつもなく強大ではあるが、言ってみれば同僚に過ぎないのである。裏切っても不義にはならない。後醍醐サイドにしてみれば、北条氏が滅べば、幕府は自動的に機能を停止すると考えていたので「北条高時らを討て」でも構わなかった。そのことは、結果的には大失敗であり、後醍醐天皇の思慮が浅い部分であったと言わざるを得ない。

しかし、尊氏も御家人もこの綸旨に乗った!そして彼らにとってこの戦いは

“幕府を倒す戦争”ではなく、“幕府を牛耳る北条氏を倒し、より適任の者に挿げ替える戦争”

なのである。そういうことであれば、挿げ替えの選択肢は一つ、源氏の嫡流に最も近く、北条氏さえ一目置き続けた最有力御家人として信望を積み重ねてきた足利氏以外にはない。そして何よりも棟梁の尊氏自身がそのやる気を皆の前で示したわけである。結論はすぐに出た。御家人たちは尊氏に未来を託すと決めた。したがって、天皇のために幕府を滅ぼしたのではなく、幕府の一員として生き残るため、その主導権を足利氏に引き渡す戦争に協力したのだ。

後醍醐天皇綸旨写



北条家を滅ぼせとはあるが
幕府を倒せとは一言も書いてない

後醍醐は討幕に向けて、本来綸旨を貰う身分ではない土民や地侍、辺境の武装商人、農村武士にまで綸旨を与え、民衆世界にある反体制、あるいは体制外的な勢力を根こそぎ倒幕軍事力として動員しようとした。そこに伝統や故実への配慮は見られず、結果的に、天皇制の危機の克服を目指したはずの後醍醐が、王権の最も重要な道具立てである綸旨の権威を回復するどころか逆に失墜させてしまったのである。建武新政以降も矛盾する綸旨、偽綸旨などの大量発行は続き、新政権が大混乱に陥ったことは言うまでもない。『二条河原の落書』にみえるように気軽に偽綸旨が作られるような空気感を生み出してしまったということなのである。



『護良親王出陣図』

『梅松論』では、兵部卿の護良親王は後醍醐天皇の密命を受け、新田義貞・楠木正成・赤松則村と共に尊氏を討つ計画を企てたが、油断をしない尊氏になかなか手を出せずにいた。同年夏、状況が変わらないことに我慢がなくなった護良は**令旨を発し、兵を集めて尊氏討伐の軍を起す**。尊氏も兵を集めた上、後醍醐天皇に謁見し、護良の行いについて上訴した。後醍醐天皇は「これは親王の独断でやったことで、朕には預かり知らぬことである」と発言し、護良親王を捕らえ、尊氏に引き渡したと記している。親王は内を通じて、帝位を奪う事などは全くの誤解であると伝奏役に渡して帝に上奏するよう申し渡した。いずれにせよ父・後醍醐との不和は、元弘の乱に際して討幕の綸旨を出した天皇を差し置いて令旨を発したことに始まると言われ、皇位篡奪は濡れ衣であると考えられている。加えて『梅松論』は「武家(足利尊氏)より君(父帝)が恨めしい」と述べたという。

建武2年(1334)11月、護良親王は足利方に身柄を預けられ、護良親王の付添いも女官1人と制限され鎌倉へ送られた。そして鎌倉将軍府にあった尊氏の弟・足利直義の監視下に置かれる。

為政者足利直義の登場

鎌倉幕府の滅亡で、各地の所領の領有権問題が大混乱に陥り、京都に訴訟が殺到した。それを専門に処理するのが雑訴決断所である。この状況を踏まえ、直義は後醍醐から二つの成果をもぎ取った。まず関東の鎌倉に雑訴決断所の地方分局を設置し、それを直義が取り仕切る権限を得た。関東地方分局を鎌倉に設ければ、京都に持ち込まれる訴訟を大幅に減らせると言うのが建付けであろう。直義はそれを実質的に幕府にしておこうと目論んでいたと見える。もうひとつの成果は直義が相模守に任じられたことであり、鎌倉時代には執権だけが就く官職であり、その地位を継承したことを武士たちに印象付けた。この直義のつくった組織を何と呼ぶか、定説はない。建武政権の中につくられた組織なので“建武鎌倉府”と呼ぶのが妥当だと説く研究者もいる。あとはここに征夷大將軍尊氏というピースを埋め込めば出来上がりとなる。この状況に危機感を感じていたのが護良親王であり、何度か尊氏を暗殺しようと図ったが、それを知りながら黙認していた後醍醐は、尊氏・護良双方が共倒れになってくれれば幸いと思っていたかも知れない。

中先代の乱(なかせんだいのらん)

建武二年(1335)7月に鎌倉幕府最後の執権である北条高時の遺児である北条時行が起こした反乱で、時行を信濃国の諏訪氏・滋野氏らが擁立し、鎌倉幕府の再興を目指し、鎌倉へ攻め上った。一時的に、足利直義が守る鎌倉を占領したが、この報を受けた足利尊氏が、後醍醐の許可を得ずに(後に征東將軍の号を得るが、征夷大將軍は許されず)東征を行い、時行軍を破り、鎌倉を奪回した。時行軍は、わずか20日あまりで鎌倉を追われることとなった(大仏殿に陣を敷いていた時行軍に落雷があり、建物が崩壊するという不運が起こったことも事実である)。中先代とは、一時的に鎌倉を支配した北条時行を「中先代」と呼んだことに由来する。鎌倉を支配した期間が短かったことから「廿日(はつか)先代の乱」とも呼ばれている。

直義の負けぶり

当初、この反乱軍は北条高時の遺児を擁していることが分からず、中山道を通して京都に向かうと予想してしまい、直義軍は出足が遅れた。勢いに乗る時行軍は、井手の沢(現町田市)にて直義軍を破り、鎌倉に入る。その後、鎌倉を脱出した直義軍を執拗に追いかけて、駿河の手越原で撃破、直義はそのまま三河国矢作まで逃げてきたが、ここでようやく尊氏軍と合流した。**直義は、勝てはしないが死にはしない**

この乱は、建武の新政に不満を持つ武士たちの動きを加速させ、足利尊氏が後醍醐天皇の許可を得ずに鎌倉へ下向し、最終的に建武政権から離反するきっかけとなったとされているが、はたしてそれだけだろうか？

後醍醐と尊氏の仲はそれほど悪くなかったのでは？

【定説】乱後に後醍醐から尊氏らに上洛命令がきたが、直義をはじめ一門総出で上洛を食い止めた。さらに関東での地盤を固めるため、先の戦いの論功行賞を行うよう詰め寄った。一方の尊氏は後醍醐との間に発生した誤解を解きたいと思っている。そうした中、直義が護良親王を誅したことがばれてしまい、後醍醐は大激怒し、足利兄弟の追討令を発布した。しかし、後醍醐に歯向かいたくない尊氏はなんとここで出家してしまう(髻を切る)。後醍醐の自分に対する怒りが大きいのなら、すべてを直義に譲り僧になる、ということらしい。戦(いくさ)が壊滅的に弱い直義は何が何でも尊氏に出陣してもらうべく、後醍醐の「出家しようが、隠居しようが罪を軽くしたりしない」という偽論旨をつくり、尊氏を追い込んだ。ここでようやく尊氏は袈裟を脱ぎ捨てて、後醍醐と戦うことを決意。このように、直義が謀略の限りを尽くし、渋る尊氏を引っ張りまくって後醍醐から離反させたとされてきた。

【新説】最近では、尊氏は自らの意志で上洛要請を見送り、論功行賞を行ったのではないかと言われている。当時はこの時点でまだ乱は終息していないと見られていて、尊氏に付き従ってきた五万の兵もちゃんとした恩賞を与えないと反乱を起こす可能性がある。一方の後醍醐も「論功行賞は朕に任せて上洛せよ」という命令以外に、尊氏の今回の勲功として従二位を与えているのである。さらには『建武二年内裏千首』に載せたい和歌があるか？と聞いている。この状況下で和歌か？と言いたいところだが、尊氏本人も乗り気で「二首考えました」と提出していて、「結構、自信があります」とも言っている。なんとも悠長なやり取りである。こうしてみると、それほど二人の仲は差し迫った関係ではなかったとも考えられる。さらに、尊氏が行った論功行賞は実は事前に後醍醐から認められていたという説もある。おそらく、鎌倉下向前に「征夷大將軍は認できないが惣追捕使は問題ない」とのやり取りがあったことは事実で、ここから想定された説であろう。ただ、足利兄弟が朝敵扱いされたのは事実であるが、その理由は、数回にわたり帰還命令を出しているにも関わらず従わなかったことにある。これは離反して新しい武家政権をつくるのでは？と、後醍醐が勝手に思い込んでしまった可能性は大である。したがって、これにびっくりした尊氏・直義兄弟は、とりあえず尊氏が隠居し、恭順の意を示し、すべて直義に移譲するという事にしたのではないか。

元弘三年(1333)新田義貞が鎌倉を目指して進軍する際、まず越後からの一族の到来を待って挙兵するなどの善後策が議論された。ここで、弟の脇屋義助は、護良親王から令旨をもらっている、鎌倉を落とすため進軍すれば味方が集まるはずだ、と積極論を述べ、その後の方針も脇屋義助の意見の通りに推移していった。こちらの新田兄弟も弟のほうが積極的である。建武二年(1336)後醍醐天皇が鎌倉方面に派遣した追討軍はこの新田兄弟であった。この追討軍に対し、謹慎している尊氏に代わって、直義が総大将、先方は高師直らが務めた。しかし義貞の戦略に嵌り、大敗北を喫す。満を持して直義が出撃するも、駿河手越川原の戦いでこちらも敗退してしまう。「次の戦いでは討死覚悟で臨む」と言った直義に危機感を募らせた尊氏は「若頭殿(直義)命をお落る、事あらば、我又存命無益也」と叫んで、ついにに立った。ただ、髻を切ったざんばら頭が目立つため、家臣たちも髻を切ることになった。今に残る騎馬武者の肖像画はこの時のものである。尊氏が竹ノ下で脇屋義助と、直義は箱根で新田義貞と激突したが、例によって直義軍は壊滅寸前であったが、尊氏軍が義助軍を追い落とし、勝利する。新田軍に従っていた佐々木判官(のちの佐々木道譽)の寝返りが致命的であったとの説がある。

足利尊氏は、源頼朝や徳川家康に並ぶ「武家の棟梁」ではあるものの、両者に比べると知名度で一步劣る印象は否めない。

事実、尊氏をめぐる神話や伝説の少なさは研究者にも指摘され、そうしたイメージは現代にも引き継がれている。尊氏の人気が低い要因としては、「後醍醐天皇に齒向かったことで、逆賊として非難されたから」などと指摘されるが、もうひとつ「精神面の不安定さ」にも注目したい。「後醍醐天皇に敵視されたことで嫌気が差し、寺に引きこもった」というエピソードがあるが、このように尊氏にはやや情緒不安定な面があり、精神的なナイーブさを持ち合わせていたようである。さらには、不可解な行動を繰り返していたため、「尊氏は精神病を患っていた!」という研究までなされていたほどである(ただし、尊氏の精神病説については、その証左はなく、異論も根強い)。また、現代風でいうところの”サイコパス”に導かれる行動パターンも決して無視はできない。

④弟の危機を聞いた途端に出陣、敵(官軍)を蹴散らす

清水寺願文

この世は夢のことくに候、尊氏にたう心たはせ給候て、後生たすけさせをはしまし候へく候、猶々とくんとせいたく候、たう心たはせ給候へく候、今生のくわほうにかへて後生たすけさせ給候へく候、今生のくわほうをは直義にたはせ給候て、直義あんきんにまもらせ給候へく候、

建武三年八月十七日

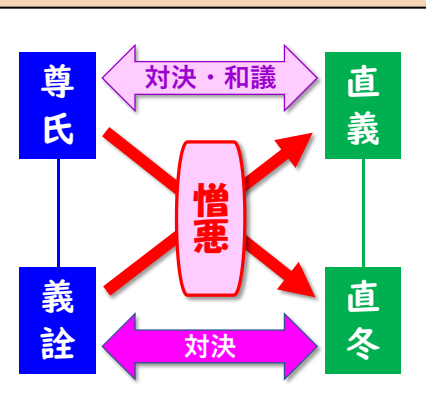
尊氏(花押)

この世は夢のようなものだ。尊氏に道心(=道德心)をくださり、来世も助けてください。早く早く出家したいです。道心ください。現世の幸せの代わりに来世助けてください。現世の幸せは直義(尊氏の弟)にあげるので、直義が安穩に過ごせるように守ってください。

この願文を出した時期は、どんな状況だったのか? 1336年8月17日、尊氏は31歳であった。7ヶ月前に箱根・竹の下で南朝の新田義貞を破り、5ヶ月前に多々良浜の戦いで九州の南朝方を破り、3ヶ月前には湊川の戦いで南朝のシンボルともいえる楠木正成を敗死させ、2日前の8月15日には北朝の光明天皇が踐祚している。まさに権力が尊氏に集まってきており、「さあ、これから!」という大事な時期なのである。実際、この願文の3ヶ月後に室町幕府の始まりとされる建武式目が制定されており、さらに2年後に、尊氏は征夷大將軍に任命されている。

世紀の兄弟喧嘩<観応の擾乱とは?>

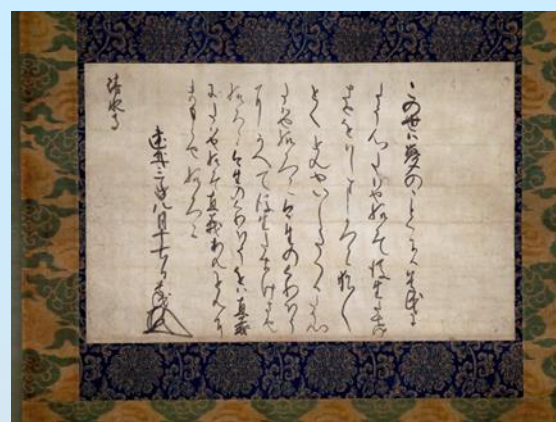
南北朝時代、正平五年/観応元年(1350)十月二十六日から正平七年(1352)二月二十六日にかけて、足利政権(室町幕府)の内紛によって起こった戦乱である。完全に直義主導で成立した室町幕府であるが、にもかかわらず、直義自身は兄尊氏を將軍に立て、自分は執権の立場に徹している。『園太暦』は直義を「天下執権の人」と見做している。目指していたのは北条泰時時代の執権政治だと言う。しかしここに大きな落とし穴があった。そもそも執権政治が順調だったのは、摂関家や親王など、別格の高貴な血筋を將軍に迎えてはいたが、それを逆手にとって雲の上に押し込めることに成功していたからに過ぎない。將軍を完全に傀儡化していたわけだ。ところが室町幕府では、血統が全く同じ二人が將軍・執権として両立しており、尊氏はすべてを直義に任せていたが、決して傀儡ではない。したがって、尊氏の意味はないが、幕府の行く末を決めるのは武士たちの世論で、それ等は必ずしも秩序を重んじる泰時風の政治を歓迎していなかった可能性がある。そこに登場してきたのが“武力がすべてだ”と言わんばかりの高師直に代表されるいわば下剋上に染まった人々であった。



將軍尊氏と政務を取り仕切る直義の足利兄弟二頭制は、尊氏直義両者の間に利害対立が頻発するようになる。師直は尊氏に近く、直義とは性格的に正反対だったこともあって、直義との対立が次第に深まっていき、幕府を二分する権力闘争へと発展していく。因みに南朝北朝双方が互角に争えた時期は非常に短い。にもかかわらず南北朝時代が六十年も続いたのは、足利氏の室町幕府が内紛を続けていたからである。

直義派と師直派の抗争は政治思想的な対立という面もあった。一方、守護以下の武士らにあっては相対する武士が師直方につけば自分は直義方につくといった具合で、つまるところ戦乱によって発生した領地や權益を巡る争いで師直、直義、尊氏、直冬、そして南朝といった旗頭になる存在を求めただけという傾向が強い。今川範国や細川頼氏等の例に見られるように、自己の都合で短期間の内に所属する党派を転々とするこゝもしばしばであった。

最近では、それ以上に、足利一家のそれぞれに不仲がありその影響が大きいとされている。すなわち、尊氏は直冬を実子であることを当初は認めておらず、一方の義詮は叔父の直義を必要以上に憎悪していたとみられている。幕府を運営していく上でこのように足利家中枢の人物同士がいがみあっていた事は政権に多大なる影響を及ぼしていたことは間違いのないであろう。



尊氏は自分が受け取るべき果報を弟に譲ることを仏に願い、直義が現世で平和に、無事に過ごせるようにと願っている。